



畳縁のデザイン価値

畳にとって必要な素材といえば、イグサである畳表と両脇を彩る畳縁です。

畳縁は昔は利用している人の身分をあらわすためのモノとして、素材からデザインまで大変に特徴あるものでした。今でもお城へ行くと部屋ごとに畳縁が違っていているのは部屋ごと利用していた人の身分の違いからです。

最近では縁なしの畳のほうが洋風の部屋との共存において違和感がない理由から縁なしが人気ですが、畳縁のデザインも考えられており洋風のデザイン縁が登場しています。

大宮縁の「今様」はアーガイル柄のかわいいデザインで全6色のヴァリエーションを揃えた新しい畳縁です。他人とは違った畳縁に今でも個性を見つけることが出来ます。



「今様」サンプル



watch the construction site

施工現場より

富山県高岡市の居酒屋「北栄亭」様での施工です。

鮎や岩魚といった新鮮な川魚を提供することで有名な同店のイメージを反映させ魚柄の縁をつけさせていただきました。また、多くの人で賑わう座敷であっても長く丈夫に利用していただけるよう熊本産イグサ表を利用しています。国産高級イグサは表面がもつこりとして、心地良い肌さわりが楽しめます。



写真 北栄亭様



What is the city?

都市思庵

島津良樹

コートハウス

東京・大田区東雪谷三丁目。私はここに住み始めて約十年になる。近所の散歩道の途中、際立って高木の樗と桐の木立の中に何か雰囲気の違いがまいる。樹木は幹が太く思い思いに育っている庭の佇まいには昔の武蔵野の林の面影が漂う。表のバス通り側は高いコンクリ壁で騒音に完全防衛的だが横の路地側は植え込みも低く敷地の中を覗き込める。300坪ほどに4棟の小住宅だから一応群建築といっているのだが、一見、材料にも意匠にも統一モチーフが無い。また初めからサイトプランを意識して作られたものでもなさそうなの

のである。しかしなんだか魅力的な住まいなのだ。何度目かに通りがかってその謎が解けた。4棟の建物で取り囲んでいるコート（中庭）のしつらえがとても自然でヒューマンスケールなのだ。残念ながら住人を見かけたことは無いのだが、そのコートにはガーデンデッキがあって、夏の夕方などビールを傾けるのに縁がきつと気持ちいいだろう。また小さな子どもや孫がいれば中庭の芝生で遊びまわる姿がおのずと想像されてくる。中庭を取り囲む4棟の住宅の距離は遠からず近からずで落ち葉の始末に困るほどの広さではない。まるで中庭の存在を強調するような群建築の配置なのである。

やがて持ち主が清家清（1918～2005）さんとその家族であることが分かってストンと合点した。清家さんは戦後モダニズム住宅の第一世代建築家のリーダー。磊落洒脱な人柄であると共に瑞宝章と紫綬褒章を受章しておられる東工大名誉教授。道理である住宅の趣味がシブイはずである。清家先生は家族や生活を住宅設計の大条件と考えた。同じスタンスの京大の西山教授の住居理論は日本住宅公団の標準設計へと結実したが清家先生は戸建住宅に珠玉の傑作を残された。戦後の民主主義時代における小住宅の空間機能と同時に美もまた追求された建築家である。

東雪谷のお宅の片隅にSLが引っ張っていた当時の貨車が1台置いてある。清家先生の鉄道模型部屋だったそうだ。どうやら今風に言う「鉄つちゃん」でもあったらしい。

しまづ・よしき / 都市アナリスト。京都大学に学び西山卯三に師事。東急総合研究所取締役地域開発研究部長・顧問を経て、立教大学大学院教授。08年よりS&Associatesを主宰。